

でも手術による治療は有用であると思われる。

#### 1A-26) 異所性下垂体腺腫と思われる2症例

神林 智作・遠藤 俊郎  
栗本 昌紀・野上 予人 (富山医科薬科大学)  
岡 伸夫・高久 晃 (脳神経外科)

画像診断上および術中所見より異所性下垂体腺腫と思われる2症例を経験し報告した。症例1: 54才男性, 2年来の精神症状の後, 頭痛・嘔吐等の脳圧亢進症状を呈した。頭蓋単純写でトルコ鞍に異常なく, CT, MRIにて鞍上部に嚢胞を伴う大きなmassを認めた。下垂体, 下垂体柄所見は正常であった。両側前頭開頭にて全摘出した。術中所見で鞍隔膜は保たれ, 腫瘍と鞍内下垂体との連続性を認めなかった。症例2: 5年前より末端肥大症を呈し, 徐々に糖尿病の悪化を認めた。MRIにて正常下垂体後面と薄い隔膜に隔てられたmassが斜台上部に認められた。術中所見で腫瘍は下垂体とは硬膜で隔てられ, 硬膜内よりの検索でも硬膜に欠損はなく腫瘍との連続性をまったく認めなかった。組織所見より2症例とも下垂体腺腫であった。われわれが渉猟する限りでは異所性下垂体腺腫は蝶形骨洞粘膜より発生することが多く, また下垂体腺腫は画像診断向上により種々の形態が報告されている。本2症例は診断上の問題点も多いがいずれも稀な形と考えられ, 画像診断および発生母地などの問題につき文献的考察を加え報告した。

#### 1A-27) 下垂体卒中の検討

田代 隆・会田 敏光  
杉本 信志・岩崎 喜信 (北海道大学)  
阿部 弘 (脳神経外科)  
宮坂 和男 (同放射線科)  
伊古田俊夫・大方 直樹 (勤医協中央病院)  
 (脳神経外科)

【緒言】下垂体卒中(以下PA)を呈した腺腫症例につき, 画像診断上の特徴, 神経徴候の予後に関し検討した。【対象】当科にて手術を施行した下垂体腺腫137例中, 術前神経徴候を呈した症候性PA7例, 及び術中所見で鞍内に血腫を認めるのみの無症候性PA6例を対象とした。内訳は男5, 女8。内分泌型は非機能性3, GH産生4, PRL産生3, ACTH産生1。神経徴候は視力障害5, 眼筋麻痺3, 意識障害2であった。【結果】①症候性PA例で術前に血腫の存在はCT施行例7例中3例, MRI施行例全例で確認された。無症候性PAでは血腫はCT施行例6例中1例も確認できないが, MRI施行例5例中3例に確認できた。②視力障害

5例中3例で発症時全盲となり, 発症から手術までの期間の短い例程視力の良い回復が得られた。眼筋麻痺3例中2例は術後一定期間後に麻痺が改善した。【結語】①MRIはCTで検出不能な血腫の描出に有効で, T1, T2 intensityにより血腫の確定診断が可能である。②重症視力障害は早期手術例ほど視力の改善が良好であった。

#### 1A-28) 下垂体腺腫に対する薬物療法

田辺 純嘉・大坊 雅彦 (札幌医科大学)  
端 和夫 (脳神経外科)

PRL産生腺腫の治療は経蝶型骨洞的に腺腫を選択的に摘出する外科的療法とbromocriptineを投与し, PRL分泌の抑制と腫瘍縮小をはかる方法があるが, 両治療法の選択は腺腫の大きさと伸展の程度, 患者の年齢, 性別, 結婚の有無, 挙児希望の有無などによって適宜選択すべきである。

今回我々は13例のPRL産生腺腫に対してbromocriptineを投与し, 血中PRL値の推移, 腺腫の縮小効果と縮小様式について検討したので報告する。

症例は男性4例, 女性9例で, 年齢は18~59才である。腺腫分類ではhuge adenoma2例, macroadenoma2例, microadenoma9例であり, microadenomaは全例女性であった。血中PRL値の推移では, huge adenomaは投与前と比較し, 著明な低下は見られるが正常域には達せず, macroadenomaとmicroadenomaは正常域に達するが, 投与を中止すると再度PRL値の上昇がみられた。腺腫の縮小効果では, huge adenoma, macroadenomaはともに著明な腺腫縮小を示すが, 海綿静脈洞内の腺腫の縮小は軽度で, microadenomaは腺腫の縮小がみられなかった。

#### 1A-29) ラトケ嚢胞のMRI所見

田辺 純嘉・八巻 稔明  
鶴野 卓史・大坊 雅彦 (札幌医科大学)  
端 和夫 (脳神経外科)  
連沼 正博・伊藤 丈雄 (函館新都市病院)

ラトケ嚢胞は胎生期のRathke's pouchの遺残組織より発生する腫瘍であり, CT所見は, 嚢胞性の低吸収域を示すものが多く, まれに等~高吸収域を示すものがある。造影剤により増強されない場合が多いが, 時にリング状の増強を認める事がある。しかしラトケ嚢胞のMRI所見についての報告は少なく, その画像所見も一定の傾向を示していない。今回我々はラトケ嚢胞6例に対してMRIを施行し, 若干の知見を得たので報告する。